

ペルシア湾北岸発見の中国陶磁

主任学芸員 森 達也

キーワード：イラン、ペルシャ湾、中国陶磁

ペルシア湾はイランとアラビア半島の間であり、古代から西アジアと東アジアを結ぶ重要な交通路であった。

ペルシア湾の交易は、アラブ帝国のアッバース王朝がイラクのバグダッドに首都を置いた 8 世紀から 13 世紀と、モンゴルがイランを支配した 14 世紀に特に盛んになった。

8 世紀から 11 世紀には海港都市であるシーラーフが交易の中心となり、12 世紀から 14 世紀にはキーシュ島、14 世紀以降にはホルムズ王国が繁栄してこの地域の交易を掌握した (図 1)。

これらの海港都市遺跡では中国陶磁が数多く発見されており、その状況は三上次男の「陶磁の道」(註 1) やデビット・ホワイトハウスのシーラーフ発掘調査報告 (註 2)、岡野智彦氏の論文 (註 3) などで紹介されている。

筆者は、2007 年 4 月から 5 月にかけて、四日市康之氏とともにこの地域の考査を行い、シーラーフ遺跡、キーシュ島、マフルーバーン遺跡などで多くの中国陶磁を調査した。本論文ではその調査の成果を報告する。

1. シーラーフ遺跡

シーラーフはかつてペルシア湾から紅海、インド洋や中国、東アフリカを結ぶ交易の中樞をになった港湾都市で、ササン朝ペルシア時代の 4・5 世紀に発展を始め、9 世紀から 10 世紀末に最盛期を迎えた。976 年または 978 年に大地震によって大きな痛手を受けた。さらに、ほぼ同じ頃に西アジアの主要海上交易ルートがペルシア湾から紅海へと移行したことによって衰退に向かった。その後、シーラーフ商人たちは世界各地に移住して商業活動を活発に行い、今朝見学したキーシュ島のハリールなどでも活躍したとされている。

デビット・ホワイトハウスを中心としたイランとイギリスの共同チームが 1966 年から 73 年に 6 次にわたって発掘調査を行ったが、イラン革命によって頓挫し、近年ではテヘラン大学のチームが調査活動を行っている。なお、大英博物館では 2007 年からシーラーフ遺跡の報告書作成プロジェクトを立ち上げており、2009 年に刊行予定とのこと。

シーラーフの都市遺跡は、海岸部に沿った低地に広がっており、その背後にある丘陵地帯には墓域が形成されている。海岸部の都市遺跡には、金曜モスク、バザー

ル、工人街などの遺構が確認されている

シーラーフ文化遺産保護局でデービッド・ホワイトハウスによる発掘調査の出土遺物を見学できたので、簡単に紹介する。

図2：越州窯青瓷

右上は10世紀後半から11世紀初頭、その他は9世紀代の碗・鉢である。右上の碗は、外面に蓮弁文が彫りだされ、内面に劃花による鳥文が施されたかなり上質の製品である。

図3：倣・越州窯青瓷（広東）

ドゥスン・ジャーと呼ばれる広東などで焼かれた粗製青瓷の壺で、9世紀頃の製品である。

図4：長沙窯青釉褐彩碗

下部に青瓷釉、上部に褐釉が施された長沙窯の碗の口縁部。

図5：邢窯白瓷

左上は壺か水注の胴部、他は碗である。左下の碗は9世紀、右上の碗は、9世紀末から10世紀頃のものである。

図6：鞏義窯白瓷碗

邢窯・定窯の白瓷に比べて素地がやや灰色かかっており、白化粧が施されるものもある。9世紀の製品である。右上と左下は輪高台の碗の破片で、口縁部が端反りとなる器形である。

図7：景德鎮窯青白瓷

左の碗の外面には蓮弁文が施されており（図7左）、11世紀の製品である。右の小破片は同じ時代のものと思われるが、中央部にコバルト顔料による藍彩が施された興味深い資料である（図7右）。釉断面の全体にコバルトの藍色がしみ込んでいるため、釉上彩でも釉下彩でもない。破片がかなり歪んでおり熱を受けた痕跡が見られることから、焼成後の白瓷の釉上にコバルト釉または顔料を施し、再び高温焼成して焼き付けた可能性が高いと考えられる。エジプトのフスタート遺跡では中国の白瓷の釉上にラスター彩を施したものが発見されていることから、この破片の藍彩も西アジアで施されたと思われる。

今回調査した中国陶瓷片には、9世紀から11世紀に中国から海外に輸出された代表的な窯の製品がほとんど含まれている。

2. キーシュ島ハリーレ遺跡

ハリーレ遺跡は、9・10世紀に貿易都市として栄えたシーラーフが、大地震によって11世紀に衰退したのち、シーラーフ商人たちが移り住んで作った都市である。13世紀から14世紀初頭にペルシア湾の交易路を握って大繁栄したが、1320年代にホルムズ王国のクトゥブディーン王に攻め落とされ、以後衰退したとされている。

遺跡はキーシュ島の北側中央の海岸付近にあり、広大な範囲に広がっている。海岸付近には、港湾施設や商館と思われる建築物がある。海岸部から少し内陸側に入

ると、モスク、バザールなどが集まった町の中心になる。

周辺には、まだ発掘調査や整備が行われていない遺構が1 km以上の広い範囲にわたって続いており、瓦礫の山といった状態の風景が広がっている。こうした瓦礫に混じって中国陶瓷が大量に散布していた。

中国陶瓷で最も多いのは13世紀から14世紀前半の龍泉窯青瓷である(図8)。13世紀代のものは少なく、14世紀前半のものが主である。次いで13世紀後半から14世紀前半の福建産の白瓷と青瓷。福建の白瓷(図9)は、徳化窯や安溪窯で見られる印花文を持つタイプや底部を型押し成型したタイプ、口縁を釉剥ぎしたタイプなどが見られる。福建の青瓷(図10)は、内底部を蛇目釉剥ぎとする泉州東門窯や莆田庄辺窯などに見られるタイプが主である。なお、福建の青瓷には、南宋の櫛目文青瓷(珠光青磁)は1点も見られなかった。

数は少ないが、景德鎮窯の製品もあり、青白瓷などかなり上質のものも見られた(図11)。元青花などの青花瓷器は1点も確認できなかったが、以前この遺跡を調査した家島彦一氏が採集した陶瓷片には元青花が含まれている。ほかに、福建や広東産と思われる褐釉や黒釉瓷の破片も少なくない(図12)。

中国陶瓷の様相から見て、この遺跡が13世紀から14世紀前半にかけて繁栄していたことはほぼ間違いないと思われる。龍泉窯青瓷の様相は1323年に沈没した韓国の新安沈船と共通しており、キーシュがホルムズ王国に打倒された1320年代という年代との関係から重要な意味を持つと考えられる。

3. マフルーバーン遺跡

ブーシェフル州最北端にある古い海港都市である。マフルーバーンの名前は10-11世紀のアラビア語イスラーム地理書にその名前が挙げられる。例えば、al-Muqaddasīの*Kitāb Ahsan al-Taqāsīm fī Ma'rifat al-aqālīm* (『諸地域の知識に関する最良なる区分の書』)ではペルシャ湾随一の交易拠点港シーラーフからアッバース朝の都バグダードの外港として繁栄していたバスラへの航路の途中でシーニーズなどの港と共にその名が挙げられており、シーラーフやホルムズなど交易港とバスラの間位置する中継港として機能していたことが知られる。また、13世紀の地理事典、Yāqūtの*Mu'jjam al-Buldān* (『地理集成』)にもマフルーバーンの項目が立てられており、シーラーフが衰退してキーシュとホルムズがインド洋交易の覇権を握った時代においても変わらず中継港として機能していたことが知られる。

現在のマフルーバーンには港の施設はなにもないが、砂浜にはイスラーム陶器や中国陶瓷の破片が数多く散布している。

中国陶瓷は9世紀から14世紀頃までの各時代のものがあり、最も多いのは13から14世紀の龍泉窯青瓷である。

最も興味深い表採品は、9世紀の白釉緑彩盤の破片(図13)で、淡褐色胎上の上に白化粧上をかけ、その上に鉛釉の透明釉と緑釉をかけている。類品は唐代中国の貿易拠点であった揚州唐城やインドネシアで発見された沈没船・黒石号、9世紀後

半にアッパース朝の都が置かれたイラクのサーマッラー遺跡などで発見されている。白釉緑彩陶器は、揚州から海路でインド洋を経てサーマッラーまで運ばれたと推定されている。マフルバーン遺跡はちょうどその海路上にあり、その輸送経路を裏付ける重要な発見である。

この遺跡で確認した中国陶瓷には、9世紀の河南省鞏義窯の白瓷と白釉陶器(図14)、9世紀の河北省邢窯の白瓷(図15)、9世紀から11世紀の越州窯青瓷(図16)、9世紀から10世紀ころの広東産の倣越州窯青瓷の壺(図17)、11世紀の景德鎮窯の青白瓷と白瓷(図18)、12世紀の福建産の白瓷(図19)、13世紀末から14世紀前半頃の福建の白瓷(図20)と青瓷(図21)、13世紀頃の龍泉窯青瓷(図22)、14世紀前半の龍泉窯青瓷(図23)などがある。これらの瓷片によって9世紀から14世紀前半にかけてこの地に継続的に中国陶瓷が運び込まれていたことがわかった。

マフルバーン遺跡はシーラーフやキーシュのようにペルシア湾交易の覇権をにぎるような大規模な海港ではなかったが、こうした中国陶瓷の状況から見て、シーラーフが10世紀末の大地震によって崩壊したり、キーシュが1320年代にホルムズとの抗争に破れて衰退したような急激な盛衰はなかったようである。少なくとも9世紀から14世紀までは継続的にかなり活発な交易をおこなっていたと思われる。中心的な貿易都市ではなく、小規模な中継港であったがためにかえって政治的・軍事的な影響を強く受けることなく、長きにわたって存続できたのかもしれない。ここで採集した中国陶瓷の組成は、シーラーフやキーシュとほとんど同じで、ペルシア湾の入り口に近いシーラーフやキーシュとペルシア湾最奥部の海港都市バスラなどを結ぶ海上交易路上の寄港地として、中継的な役割を果たしたのであろう。

4. 結語

本論文では、8世紀から11世紀に栄えたシーラーフ、12世紀から14世紀に栄えたキーシュ、およびこれら2つの貿易拠点と重なる時代に継続した中継港マフルバーンで発見した中国陶瓷を紹介した。これら3つの遺跡の遺物によって9世紀から14世紀に西アジアに輸出された中国陶瓷の生産地や器種の変遷の概要が明確化できる。

晩唐から五代(9世紀から10世紀前半)には、越窯青瓷、邢窯白瓷、長沙窯製品、鞏義窯の白瓷・白釉緑彩陶・白釉陶、広東産の倣越窯青瓷壺などが輸出された。

北宋前・中期の11世紀になると、越青瓷、景德鎮窯白瓷・青白瓷が中心となる。北宋後期から南宋前期の12世紀代の遺物は少ないが、景德鎮窯の青白瓷、福建白瓷が少量見られる。

南宋中期の13世紀代になると龍泉窯青瓷が多量に輸出されるようになり、景德鎮窯の青白瓷がこれに次ぐ。元代になると、龍泉窯青瓷を中心に、景德鎮窯白瓷・青白瓷、福建の白瓷、粗製の青瓷が主な輸出品となる。

全体的な大きな変遷を見ると、晩唐五代と宋・元代の間に大きな変化が起こり、上質の青瓷は越窯から龍泉窯へと移り変わり、上質の白瓷は邢窯・鞏義窯から景德

鎮へと移る。このような変化は、中国国内での青瓷、白瓷の生産中心の変遷をそのまま反映している。また粗製品は晩唐・五代には広東産が中心であったが、宋・元代には福建産が中心となる。これは唐代には西方向けの主要貿易港が廣州であったのが、宋代になると福建省泉州が西方貿易の拠点港となったことを反映している。

なお、本稿は〈森達也「伊朗波斯湾北岸幾個海港遺址發現的中国瓷器」『中国古陶瓷研究』14 紫禁城出版社 2008年〉の日本語版である。

註

- 1 三上次男:『陶磁の道』, 岩波新書 1969年。
- 2 David Whitehouse, "Excavations at Siraf: First Interim Report," Iran, vol. 6, 1968, pp.1-22.
David Whitehouse, "Excavations at Siraf: Second Interim Report," Iran, vol. 7, 1969, pp.39-62.
David Whitehouse, "Excavations at Siraf: Third Interim Report," Iran, vol. 8, 1970, pp.1-18.
David Whitehouse, "Excavations at Siraf: Forth Interim Report," Iran, vol. 9, 1971, pp.1-17.
David Whitehouse, "Excavations at Siraf: Fifth Interim Report," Iran, vol. 10, 1972, pp.63-87.
David Whitehouse, "Excavations at Siraf: Sixth Interim Report," Iran, vol. 12, 1974, pp.1-30.
David Whitehouse, "Some Chinese and Islamic Pottery from Siraf," Pottery and Metalwork in Tang China, London, 1972, pp. 30-34.
- 3 岡野智彦:「ペルシャ湾岸の貿易陶磁出土遺跡の現況」『貿易陶磁研究』No.16, 日本貿易陶磁研究会 1996年。

参考文献

- 森達也「イランやきもの紀行1」『陶説』No.652, 日本陶磁協会 2007年7月。
森達也「イランやきもの紀行2」『陶説』No.653, 日本陶磁協会 2007年8月。
森達也「イランやきもの紀行3」『陶説』No.655, 日本陶磁協会 2007年10月。
森達也「イランやきもの紀行4」『陶説』No.661, 日本陶磁協会 2008年4月。
森達也「イランやきもの紀行5」『陶説』No.662, 日本陶磁協会 2008年5月。
森達也「イランやきもの紀行6」『陶説』No.663, 日本陶磁協会 2008年6月。
森達也「イランやきもの紀行7」『陶説』No.664, 日本陶磁協会 2008年7月。



図1 遺跡地図

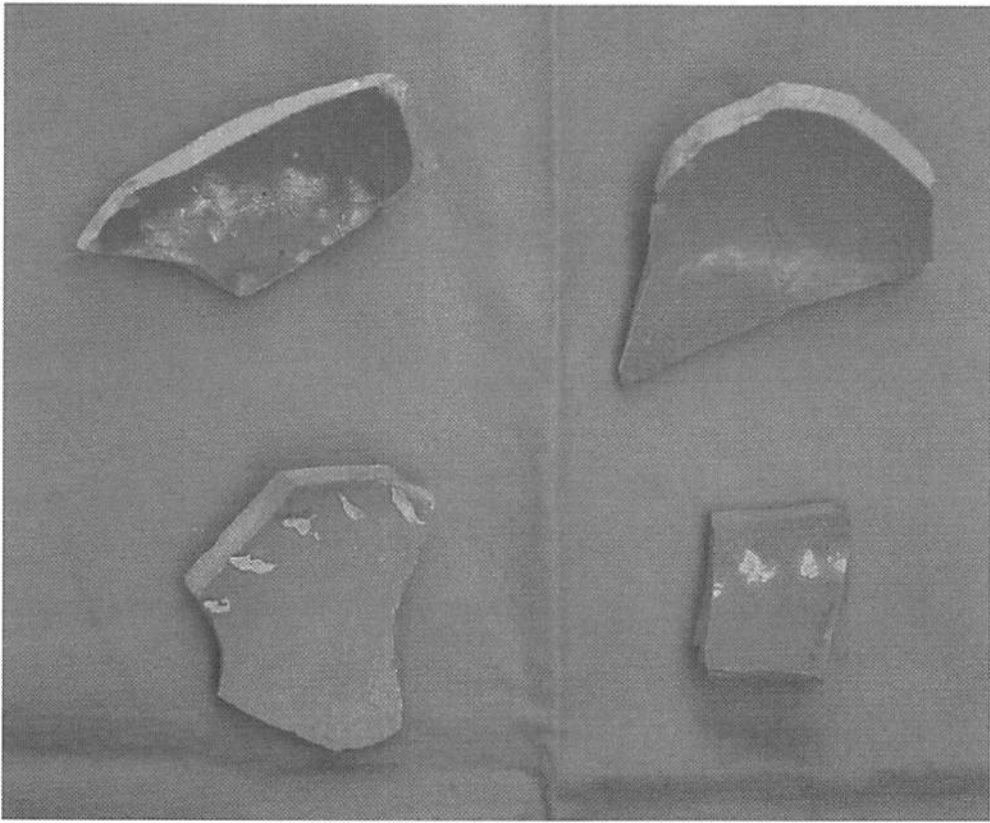
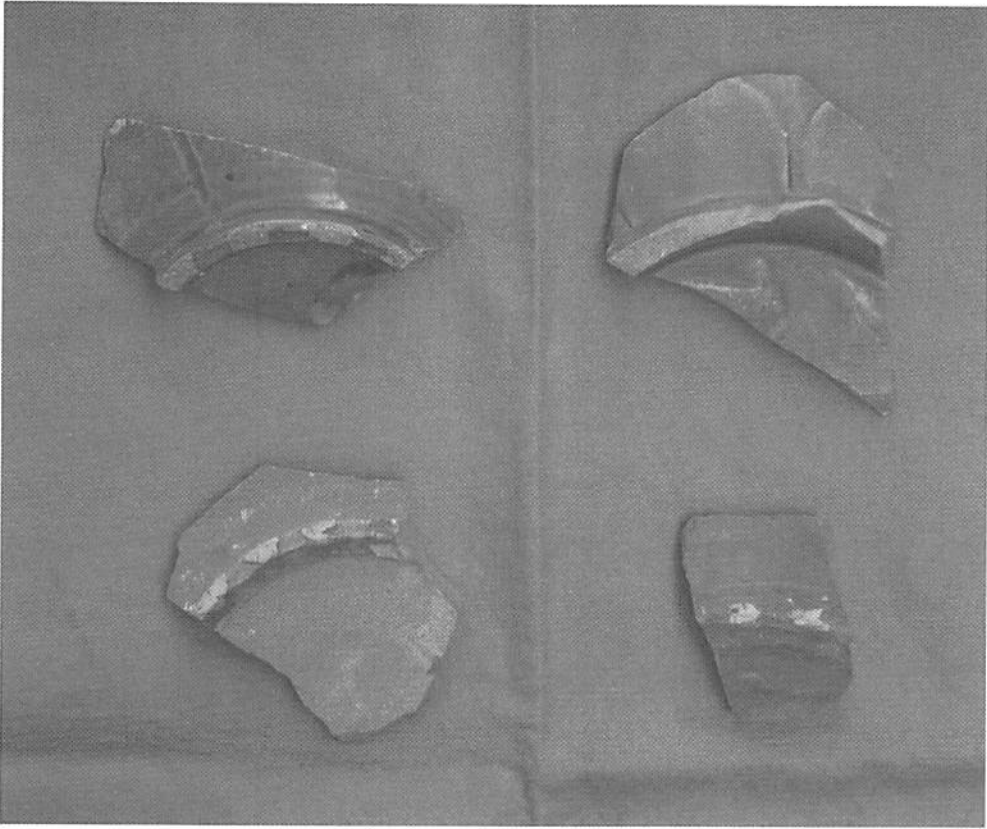


図2（上、下） 越州窯青瓷 シーラーフ遺跡出土

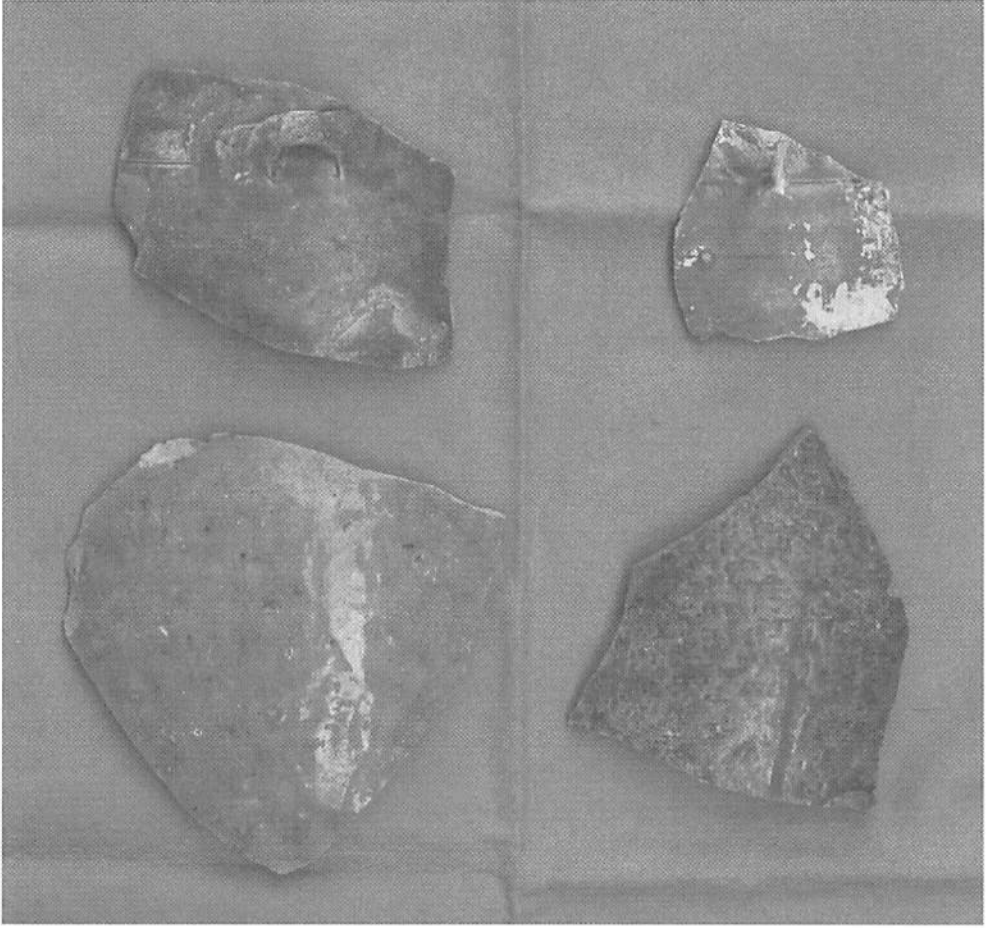


図3 倣・越州窯青瓷（広東） シーラーフ遺跡出土

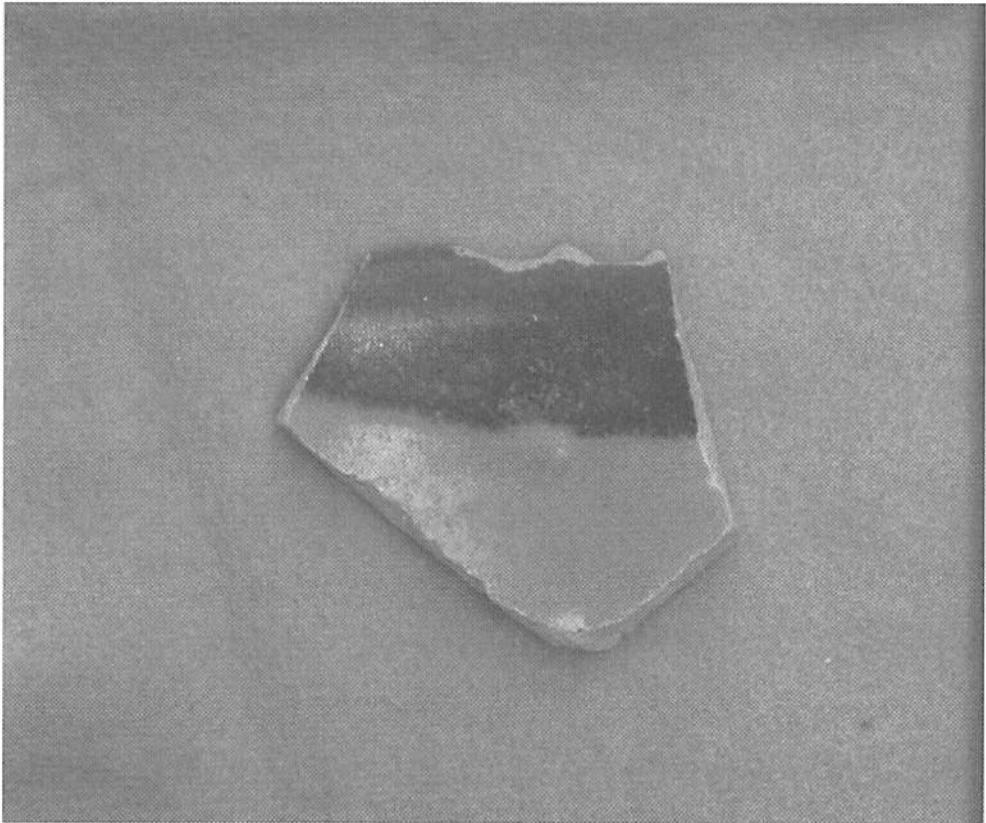


図4 長沙窯青釉褐彩碗 シーラーフ遺跡出土

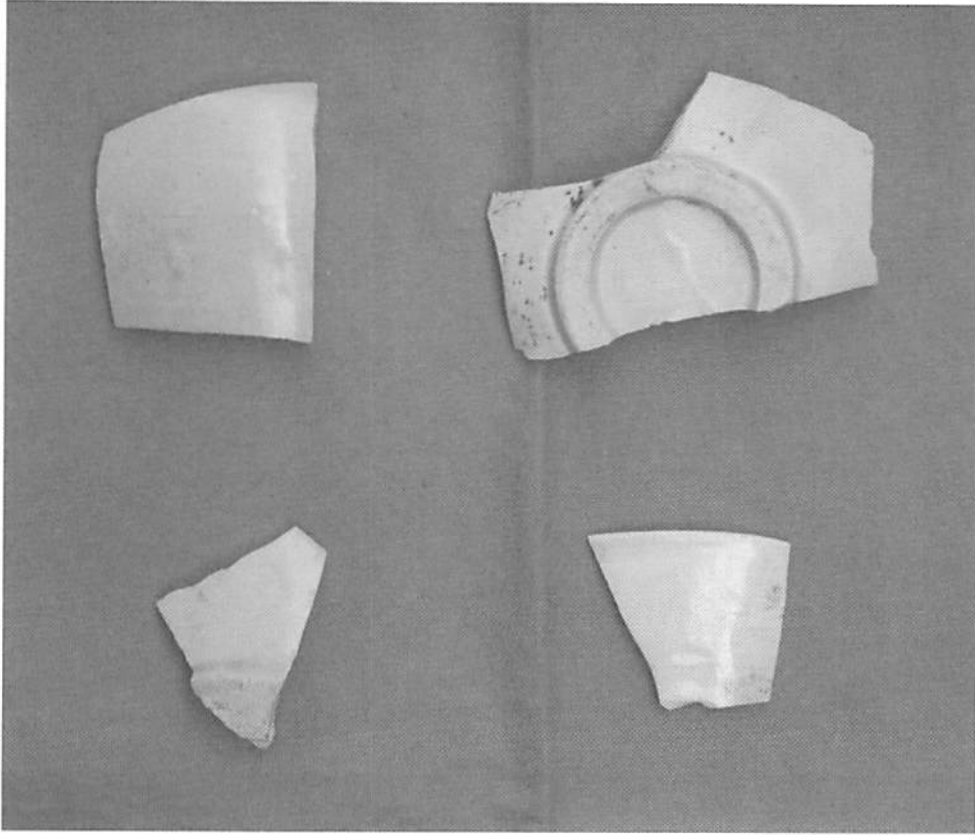


図5 邢窯白瓷 シーラーフ遺跡出土

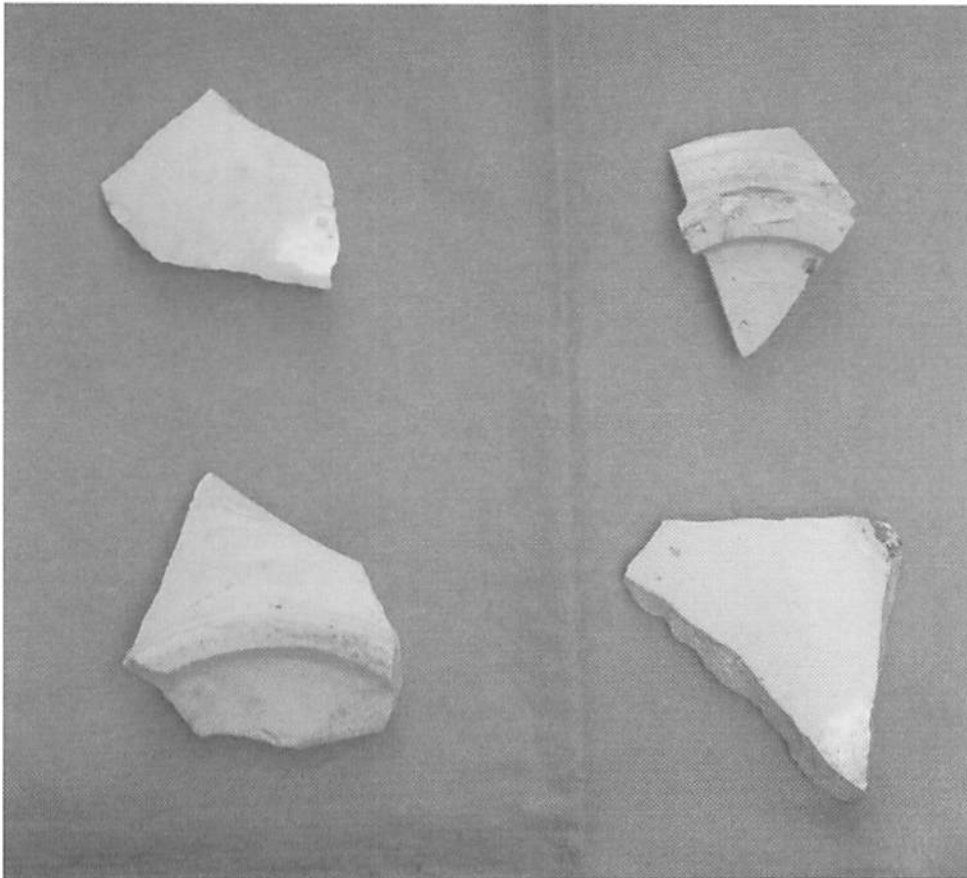


図6 鞏義窯白瓷碗 シーラーフ遺跡出土



図7 景德鎮窯青白瓷 シーラーフ遺跡出土

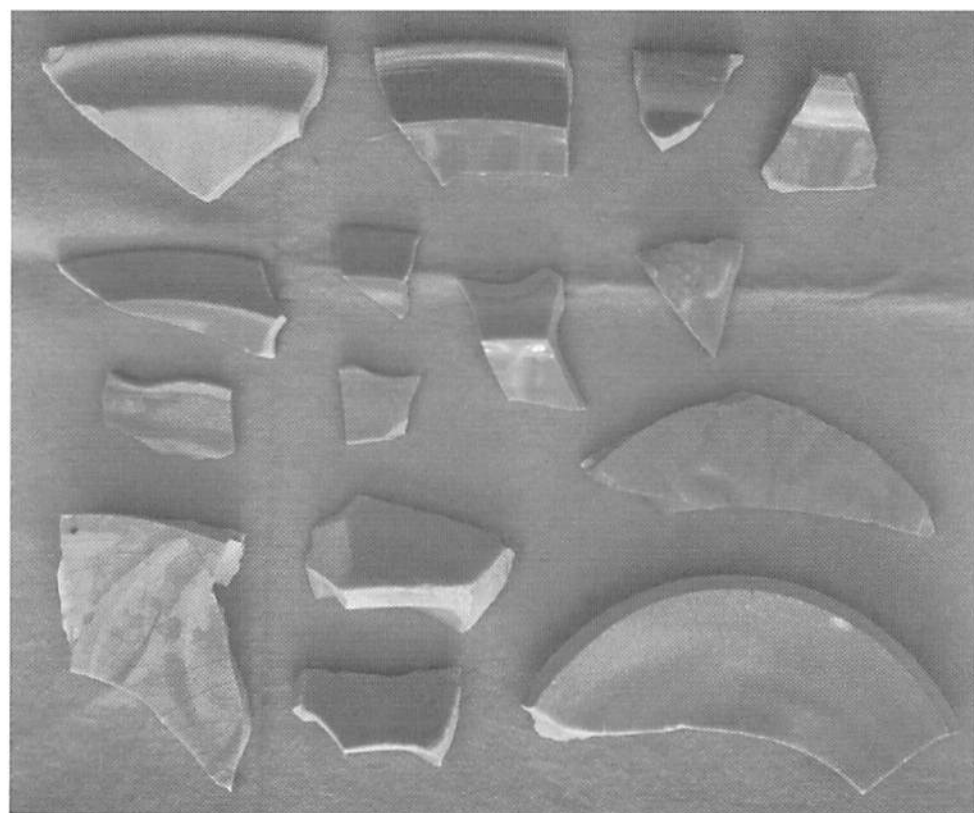


図8 龍泉窯青瓷 ハリーレ遺跡出土

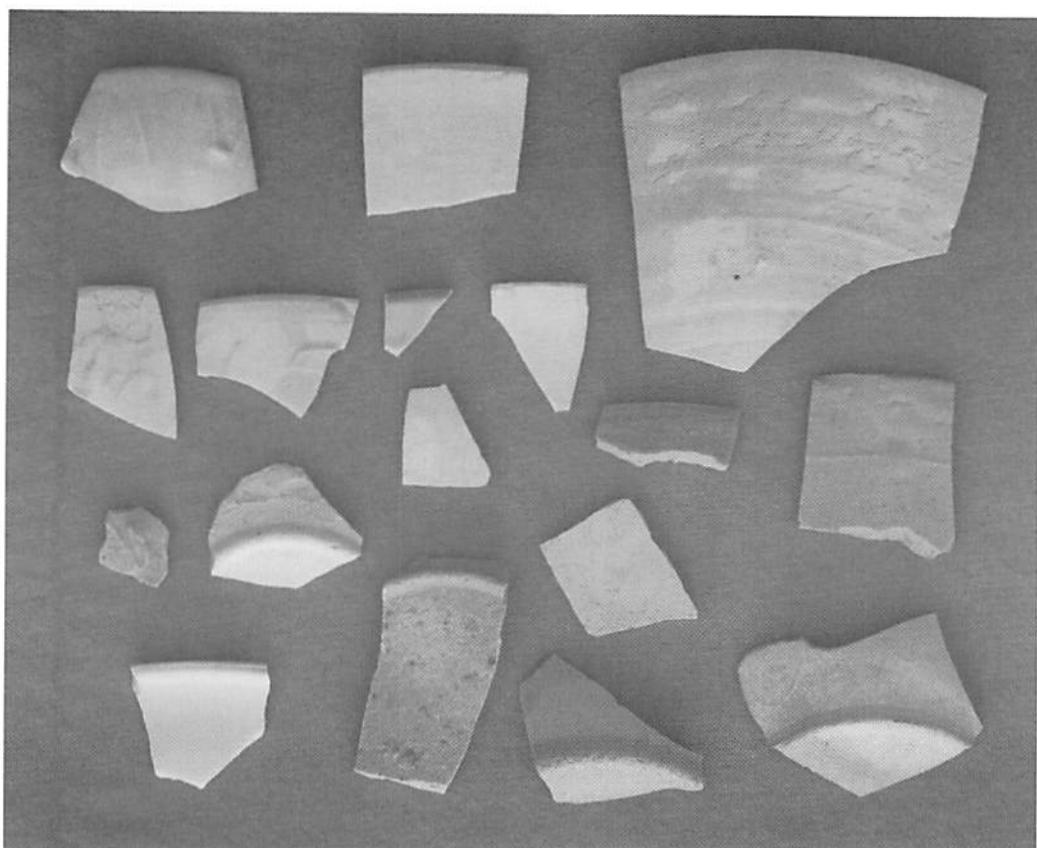


図9 福建白瓷 ハリーレ遺跡出土

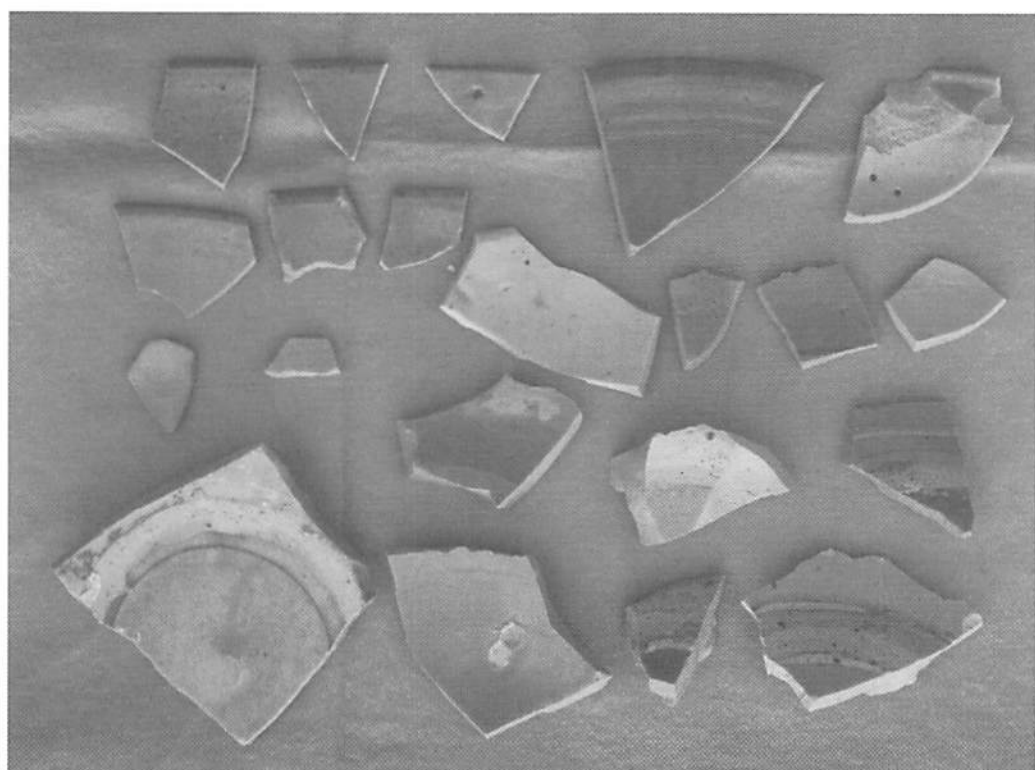


図10 福建青瓷 ハリーレ遺跡出土

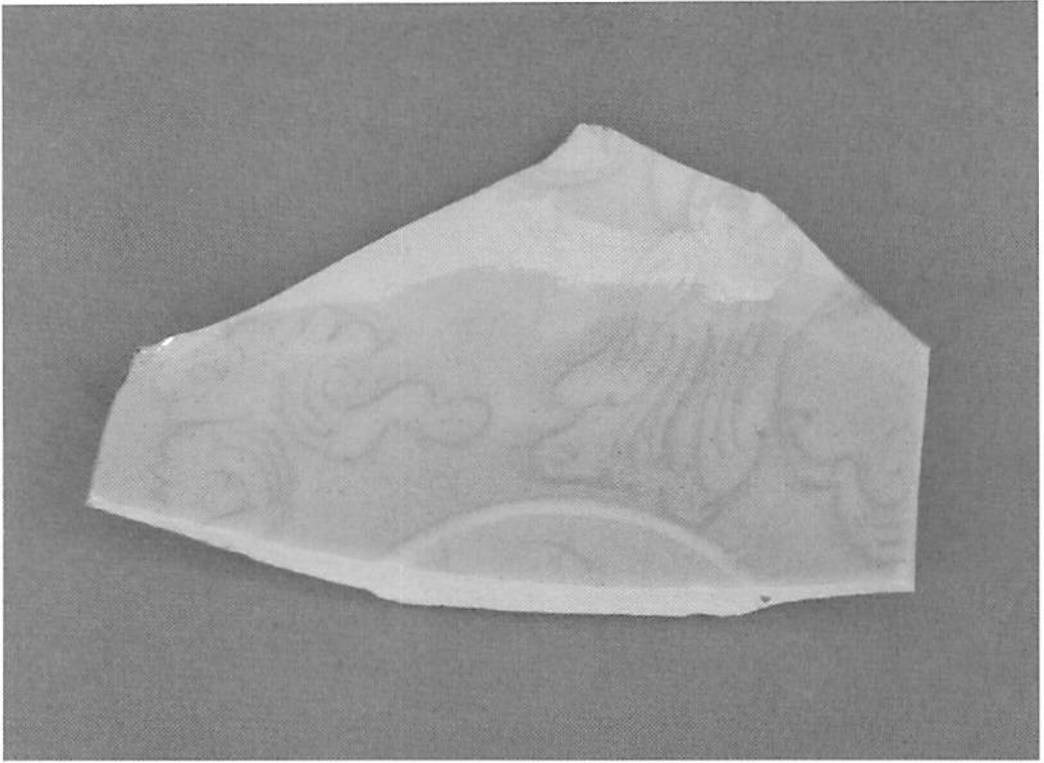


図 11 景德鎮窯青白瓷 ハリーレ遺跡出土

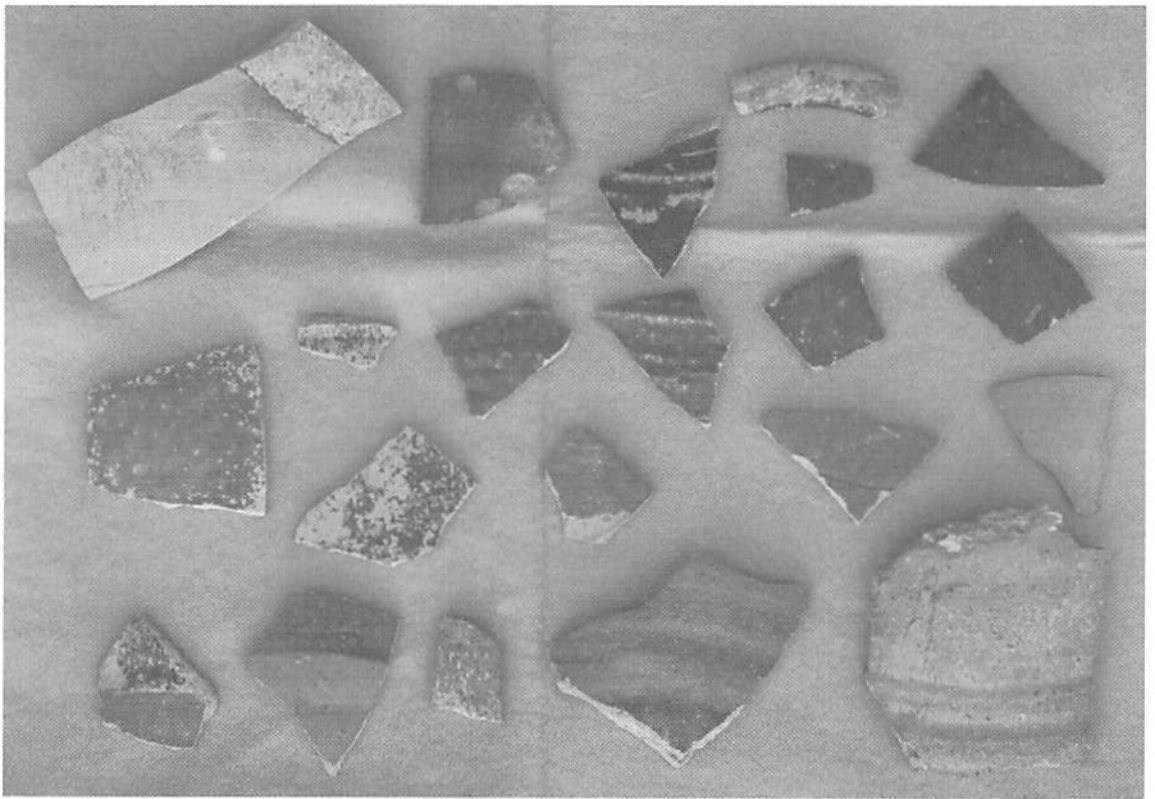


図 12 福建・広東産褐釉瓷、黒釉瓷 ハリーレ遺跡出土



図 13 白釉緑彩盤 マフルーバーン遺跡出土

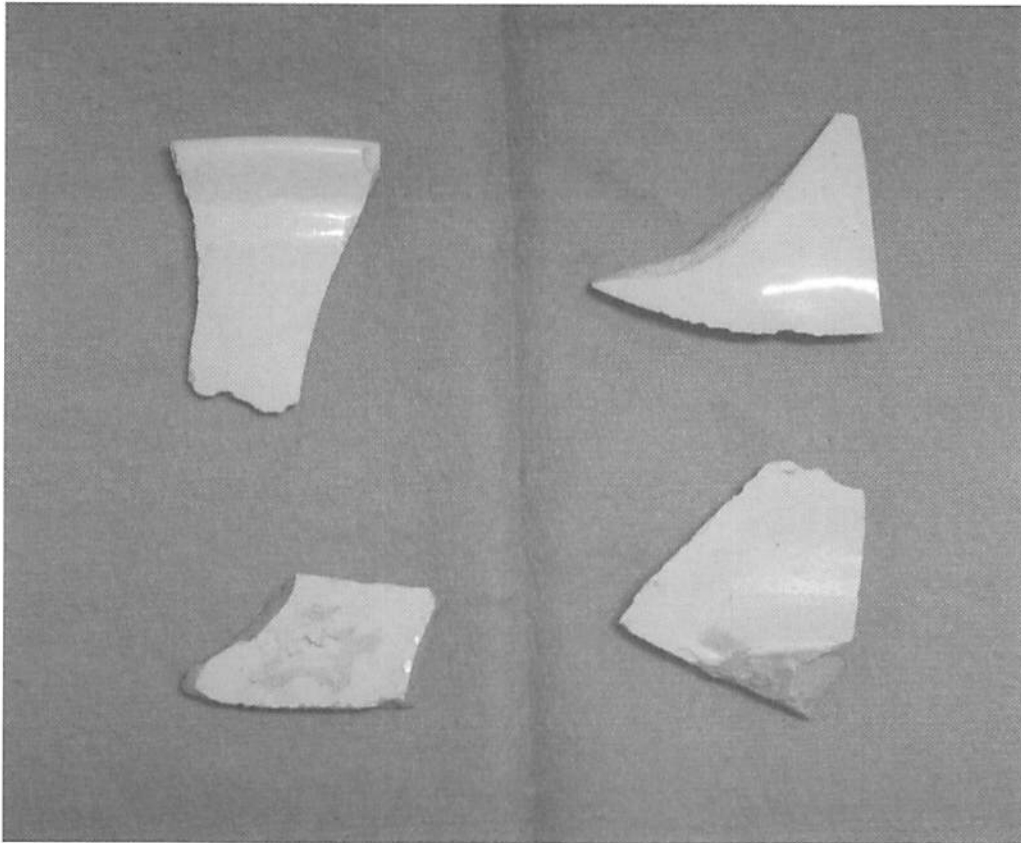


図 14 鞆義窯白瓷、白釉陶器 マフルーバーン遺跡出土

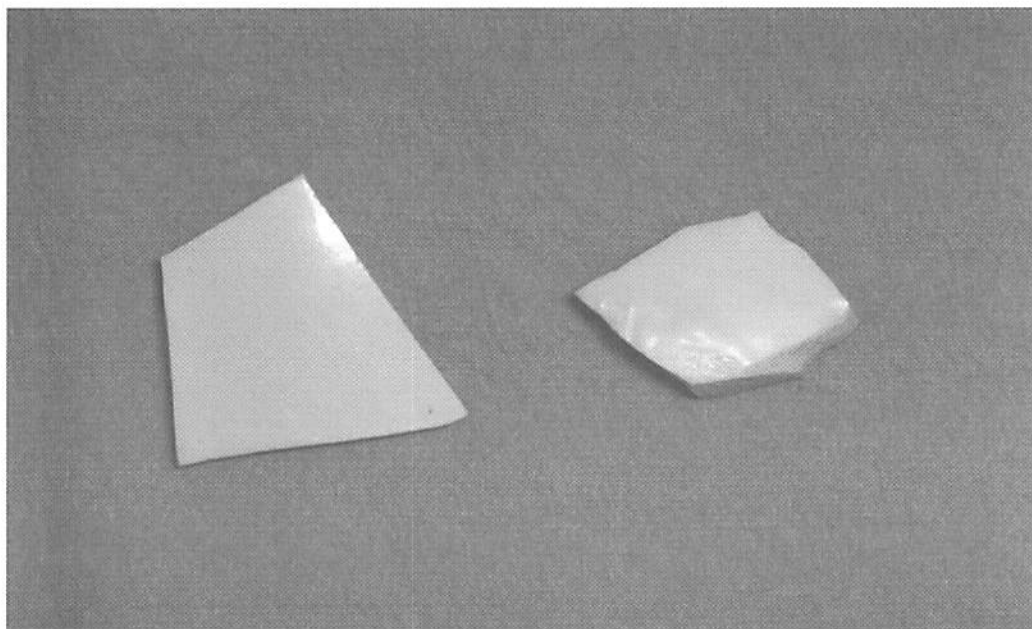


図 15 邢窯白瓷 マフルーバーン遺跡出土



図 16 越州窯青瓷 マフルーバーン遺跡出土



図 17 倣・越州窯青瓷（広東） マフルーバーン遺跡出土

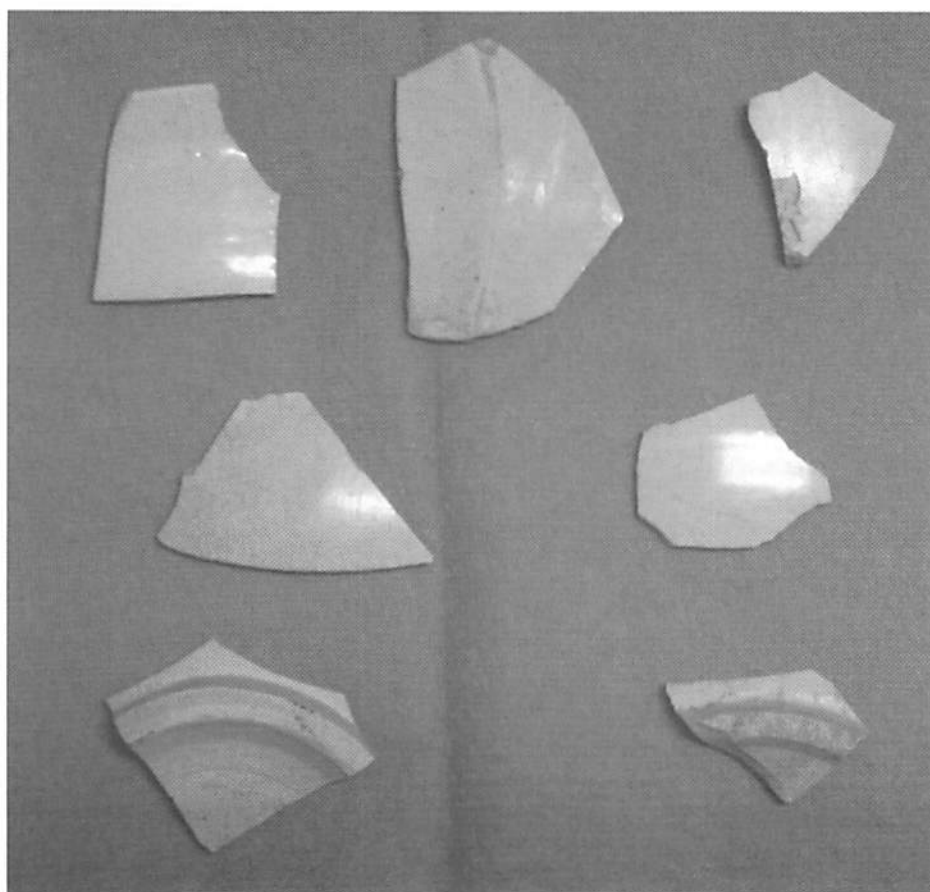


図 18 景德鎮窯青白瓷、白瓷 マフルーバーン遺跡出土

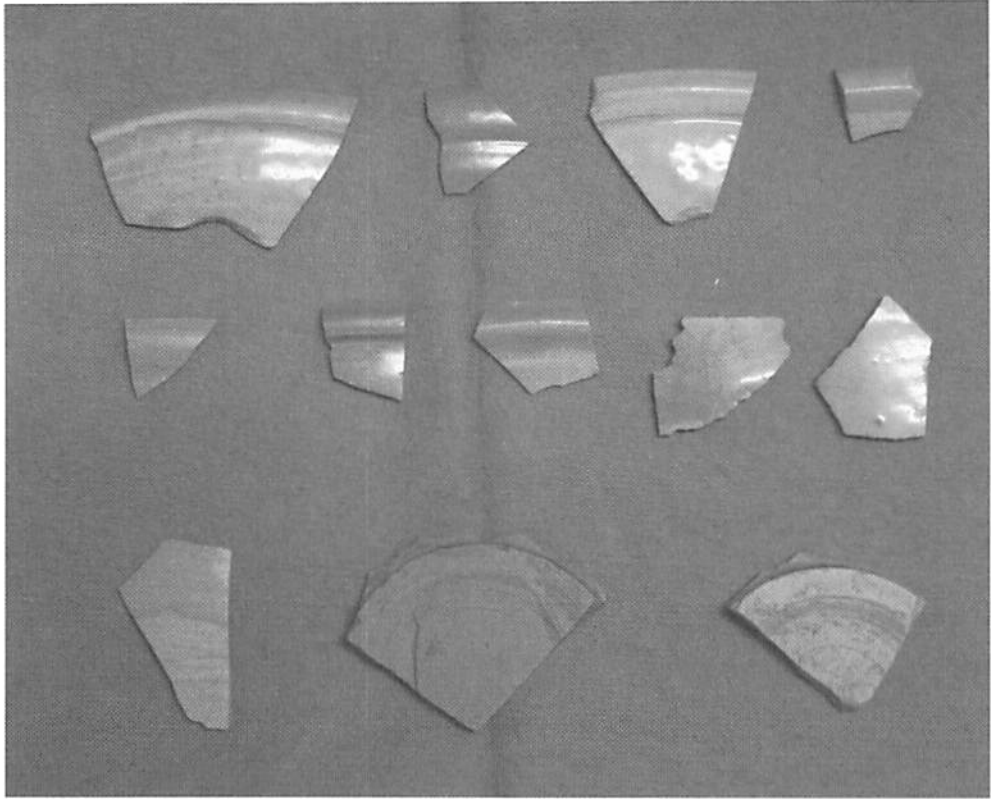


図 19 福建白瓷 マフルーバーン遺跡出土

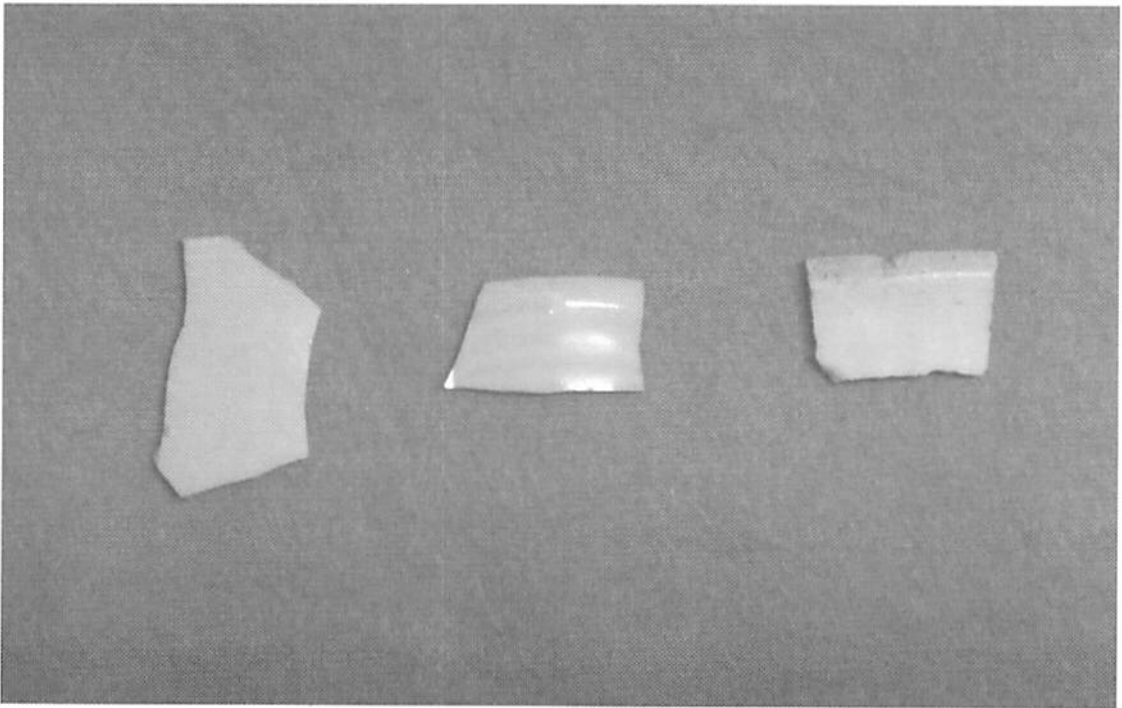


図 20 福建白瓷 マフルーバーン遺跡出土

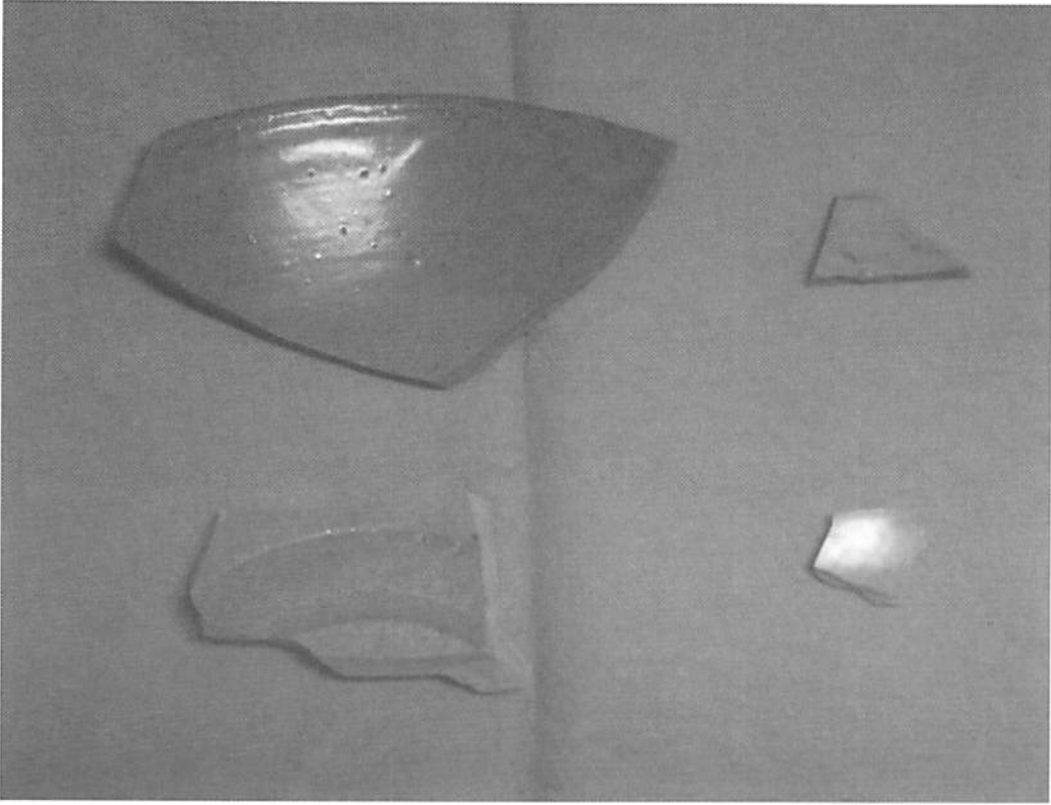


図 21 福建青瓷 マフルーバーン遺跡出土



図 22 龍泉窯青瓷 マフルーバーン遺跡出土

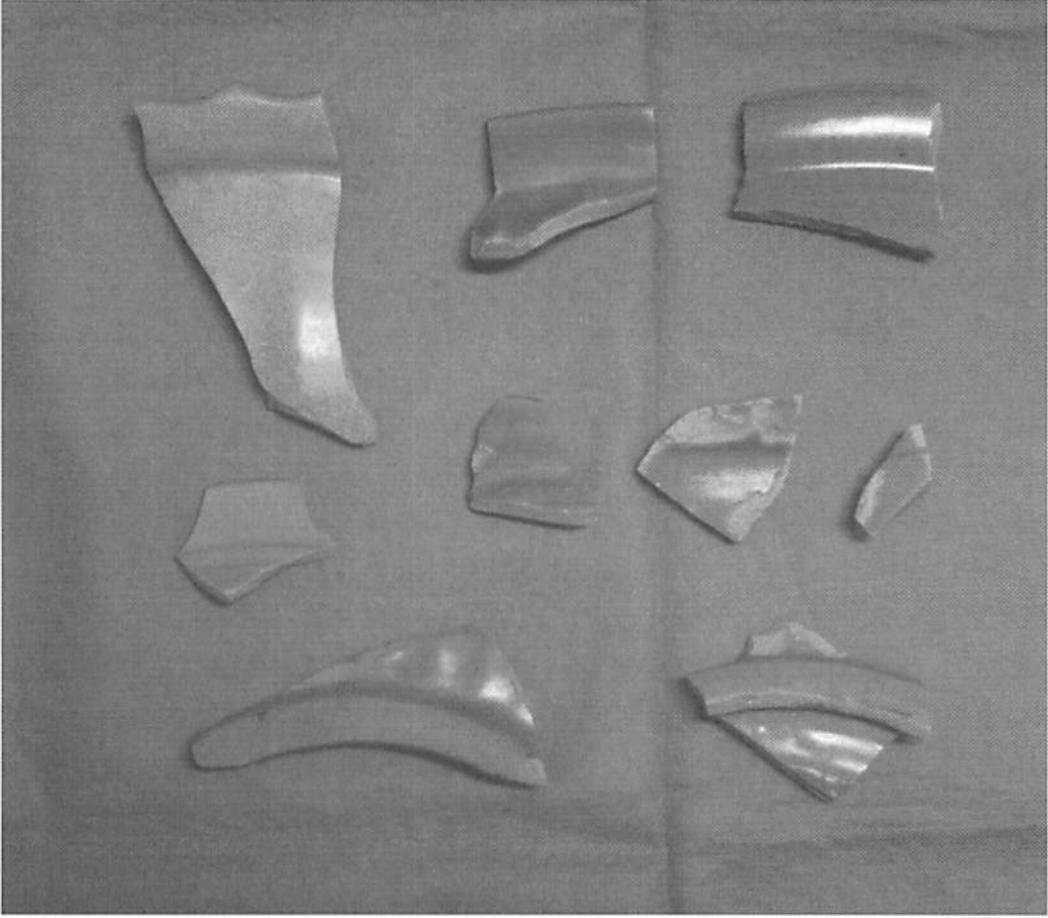


図 23 龍泉窯青瓷 マフルーバーン遺跡出土

撮影：

図 2～23 筆者による